



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連(fulltext)
Author(s)	宮澤, 仁; 福富, 護
Citation	東京学芸大学紀要. 総合教育科学系, 59: 211-221
Issue Date	2008/2/29
URL	http://hdl.handle.net/2309/89168
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連

宮澤 仁・福富 護

教育心理学*

(2007年9月28日受理)

キーワード：ゲイ，レズビアン，メディア

1. 問題と目的

1.1 同性愛に関する背景・歴史

同性愛者に対する社会からのまなごしは歴史的に厳しかったが、1969年のニューヨーク・ストーンウォール事件を契機に解放運動が盛んになった。1993年には世界保健機関の国際疾病分類（ICD）から同性愛が削除された。世界でのこうした変化にも関わらず、日本の同性愛者の知人を持っているとする割合は10～20代で2割に満たず（17.6%）、年長になるほど割合が減少していく（「タブー調査」博報堂生活総合研究所，2004）。日本の多くの人は現実の同性愛者を知らず、メディアでのみ同性愛者を認識し、「（同性愛者が）「見える」と思い込んでいたのは錯覚で、実は何も「見えていない」（市川，2004）というのが現実だと思われる。一方で電通総研「世界価値観調査（2005年）」では、4割弱が同性愛を認め、前々回（95年）は約2割、前回（2000年）は約3割が認めていたことから、毎回約10%近く伸びていることが指摘されている。

1.2 心理学の同性愛者に関する研究

日本の心理学領域において、ICDの削除以降に同性愛者を取り扱った研究は限られている。

和田（1996）は同性愛に対する態度測定を目的とする尺度を開発して、3つの因子構造を見出し、各因子を「社会的容認度」「心理的距離感」「ポジティブイメージ度」と命名している。さらに協力者の性役割同一性が測定され、男女ともに社会から期待される性役割を高く持つ人

ほど、同性愛を好ましく思わないと示唆している。和田は接触度や時代に即応した性役割との関連を検討すべきだと述べている。

堀田（1998）は臨床の枠組みとして、「同性愛アイデンティティの形成」という新しいモデルを提示し、大学生が同性愛の問題に最も直面しやすく、臨床家には同性愛に関する適切な知識とサポートが求められると述べている。

日高（2004）はインターネット調査で、当事者のメンタルヘルスが悪く、その傾向は特に若年層で見られると示唆し、それは結婚などの社会的価値観に対応するストレスが最も強くかかるからだとしている。さらにネガティブ情報が当事者のメンタルヘルスに影響を与えているという指摘もある（石丸，2004）。

その一方で、渡辺（2005）は若年同性愛男性4人の事例的研究で、彼らに性的指向を受容する葛藤・苦悩が見られず、自分たちのことを「普通」と捉えているとし、渡辺はメディアでの同性愛者の可視化を要因として指摘している。

中村（2006）は和田（1996）の態度尺度の再検討と接触度との関連を検討し、日常的に同性愛者と接触する人は、ポジティブイメージや接近感情を持ちやすく、メディアで間接接触する人はそうなりにくいことを示唆している。

1.3 メディアと偏見

渡辺（2005）は、インターネットを通じた同性愛者の交流が活発であるとしている。これは日高ら（2004）も

* 東京学芸大学（184-8501 小金井市貫井北町4-1-1）

指摘し、同性愛者が日常得られない活動の場をインターネットで見出し、社会的孤立から解放されるからだという。「同性愛入門」(伏見憲明編)では、特に若年層でその傾向が顕著であり、性的指向を容易に受け入れると指摘している。一方で日高ら(2004)は、インターネットが性的な出会いを容易にし、危険な交流を行いやすくしたというデメリットも挙げている。いずれにしても、インターネットで当事者の可視化も進んでいると考えられる。

海外のメディアに関する調査では、イギリスのBatchelorら(2004)が、イギリスの若者向けメディアにおける性表現を調査し、ゲイやレズビアン肯定的表現が欠如していると述べている。これは社会の多様性の欠如であり、マイノリティの子どもにも悪影響があるとしている。この解決策として、「メディア・リテラシーを促進させること」を示唆している。メディア・リテラシーとはMasterman(1995)が提唱した概念で、「個人がメディアを主体的かつクリティカルに分析する能力」と定義されている。

志村(2005)はメディア・リテラシーの受動的側面が偏見の知識的側面に影響し、メディア・リテラシーの多様な価値観に対する受容性の側面が偏見の対人イメージ的側面に影響すると分析し、メディア・リテラシーの改善が偏見の緩和につながる可能性と、同時に対人イメージの改善には、精神障害者に限らず多様な価値観に対する受容度を高める必要があると示唆した。

同性愛者や精神障害者に対する態度形成において、メディアの果たす役割は大きい。特に日常的な直接接触がない場合のメディアの影響は大きくなる。本研究は、同性愛者に対する態度とメディア・リテラシーとの関連を検討することにより、同性愛者に対する偏見や差別の軽減に役立てようとするものである。

1. 4 目的

本研究では、第1の目的として同性愛者(ゲイ・レズビアン)に対する態度の構造を分析し、その態度とメディア・リテラシーとの関連を検討する。さらに、同性愛者に対する態度と性役割態度との関連を第2の目的とし、第3の目的として接触度との関連を再検討する。

2. 方法

2. 1 調査概要

方法は質問紙調査法により、都内の国立大学学生(371名)に配布し、362名の回答を得た(回収率97.6%)。

2. 2 測度

協力者の認知している性別を問う質問に加えて、以下の測度が採用された。

①ゲイに対する態度尺度(ゲイ尺度)

和田(1996)や中村(2006)の尺度、志村(2005)の「精神障害に対する態度尺度」と「社会的距離尺度」を参考に、ゲイ尺度(47項目)を作成した。回答は、「全くそう思わない」「ほとんどそう思わない」「ややそう思う」「とてもそう思う」の4件法で求め、得点が高いほどゲイに対する態度が肯定的と判定される。

②レズビアンに対する態度尺度(レズビアン尺度)

全てのゲイ尺度項目の「ゲイ」を「レズビアン」に置き換えて、レズビアンに対する態度尺度とした。

③メディア・リテラシー尺度(ML尺度)

志村(2005)のメディア・リテラシー尺度(25項目)を採用した。回答は「全くそう思わない」「ほとんどそう思わない」「あまりそう思わない」「少しそう思う」「かなりそう思う」「とてもそう思う」という6件法で求め、高得点であるほどメディア・リテラシーが高いことを示す。

④平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)

鈴木(1994)が開発したもので、高得点ならば平等主義的で低得点ならば伝統主義的な性役割態度を示すものである。回答は「当てはまらない」「あまり当てはまらない」「どちらでもない」「少し当てはまる」「当てはまる」という5件法である。

⑤接触体験等に関する項目群

接触体験等に関する質問項目では、以下の項目について尋ねた。

・同性愛者との接触体験の有無

・接触体験の詳細

接触の場面を9項目の多重回答形式で質問した。

「家庭で」「友人関係で」「親族との付き合いで」

(以上3項目は[接触度高群])

「趣味のサークルで」「学校で」「アルバイト先で」

(以上3項目は[接触度中群])

「近所で」「通学・外出時で」「テレビ等のメディアの中で」

(以上3項目は[接触度低群])

・テレビ、新聞、インターネット、ミクシイの1週間平均利用日数

それぞれ下記5段階で多項選択法の質問をした。

「全く観ない(読まない)」「1日～2日」「3日～4日」

「5日～6日」「7日(毎日観る)(読む)」

3. 結果

3. 1 ゲイ尺度及びレズビアン尺度の因子分析結果

ゲイ態度の因子分析（主因子法，プロマックス回転）の結果，28項目が精選，4因子が抽出された（表1）。第1因子はゲイとの親密さや接近感情を示すため「心理的距離因子」，第2因子はゲイに対するポジティブイメージを示すため「ポジティブイメージ因子」，第3因子はゲイに関する社会的な認識を示すため「社会的認知因子」，第4因子はゲイに対するネガティブイメージを示すため「ネガティブイメージ因子」と命名した。なお表1の項目に，「※」を付与してあるものは逆転項目である。

同様にレズビアン尺度の因子分析の結果，30項目が精選，4因子が抽出された（表2）。因子構造はゲイと同様になり，それぞれ「心理的距離因子」，「ポジティブイメージ因子」，「社会的認知因子」，「ネガティブイメージ因子」であった。こちらも同様に「※」が付与してあるものは逆転項目である。

3. 2 ML尺度の因子分析結果

ML尺度の因子分析（主因子法，プロマックス回転）の結果では，4因子が抽出された。志村（2005）と同様に，第1因子は「問題解決に対する主体性志向因子（以下，主体性志向因子）」，第2因子は「メディアの非中立性に対する理解因子（以下，非中立性理解因子）」，第3因子は「情報の解釈の多様性に対する理解因子（以下，多様性理解因子）」，第4因子は「客観性に対する志向因子（以下，客観性志向因子）」と考えられる。

3. 3 ゲイ尺度の各因子得点と接触度・ML尺度の関連

ゲイ態度尺度の因子分析された各因子得点（因子に負荷量が高かった項目の得点を合計したもの）について，接触度（高中低群）とメディア・リテラシー（高低群）の二要因分散分析を行った。接触度は接触の場面9項目のうち，「友人関係で」を選んだ者を高群とし，高群の協力者を除いて，「趣味のサークルで」「学校で」「アルバイト先で」を1つでも選んだ者を中群，そして高・中群以外の協力者で，「近所で」「通学・外出時で」「テレビ等のメディアの中で」を1つでも選んだ者を低群とした。メディア・リテラシーの群は，ML尺度の合計得点の平均値より高得点の協力者を高群，平均値以下の協力者を低群とした。

ゲイ態度のポジティブイメージ因子は1%水準で接触度に有意な主効果が見られ（ $F(2, 140)=4.99, p<.01$ ），多重比較では接触度高群と中群の間に5%水準で有意に差があり，高群が大きかった。心理的距離因子

（ $F(1, 140)=6.15, p<.05$ ）・社会的認知因子（ $F(1, 140)=9.80, p<.01$ ）・ネガティブイメージ因子（ $F(1, 140)=8.13, p<.01$ ）では，メディア・リテラシー高群が有意に大きかった。

3. 4 レズビアン尺度の各因子得点と接触度・ML尺度の関連

ゲイ尺度と同様にレズビアン態度尺度についても，接触度（高中低群）とメディア・リテラシー（高低群）の二要因分散分析を行った

心理的距離因子（ $F(1, 150)=4.42, p<.05$ ）・ネガティブイメージ因子（ $F(1, 150)=5.24, p<.05$ ）・社会的認知因子（ $F(1, 150)=11.43, p<.01$ ）では，ゲイと同様にメディア・リテラシー高群が有意に大きかった。

3. 5 ゲイ尺度の各因子得点とSESRA-S・性別の関連

ゲイ尺度についてSESRA-S（高低群）と性別（男女）による二要因分散分析を行った。SESRA-Sは合計得点の平均値より高得点の協力者を高群，平均値より低得点の協力者を低群とした。

ゲイの心理的距離因子（ $F(1, 311)=10.19, p<.01$ ）でSESRA-Sに1%水準の主効果が見られ，高群が有意に大きかった。

性別の主効果は，心理的距離因子（ $F(1, 311)=8.80, p<.01$ ）・社会的認知因子（ $F(1, 311)=8.34, p<.01$ ）・ポジティブイメージ因子（ $F(1, 311)=6.30, p<.05$ ）で性別に有意な主効果が見られ，女性のほうが大きかった。

3. 6 レズビアン尺度の各因子得点とSESRA-S・性別の関連

ゲイと同様に，レズビアン尺度についてもSESRA-S（高低群）と性別（男女）による二要因分散分析を行った。

レズビアンの心理的距離因子（ $F(1, 327)=9.07, p<.01$ ），ネガティブイメージ因子（ $F(1, 327)=13.21, p<.01$ ），社会的認知因子（ $F(1, 327)=9.77, p<.01$ ）でSESRA-Sに1%水準の主効果が見られ，高群が有意に大きかった。

性別の主効果は，レズビアンでは心理的距離因子（ $F(1, 327)=4.42, p<.05$ ）は男性が有意に大きく，ネガティブイメージ因子（ $F(1, 327)=13.21, p<.01$ ）・社会的認知因子（ $F(1, 327)=5.76, p<.05$ ）では女性が有意に大きかった。

3. 7 ゲイ尺度とML尺度の関連

ゲイ尺度の下位尺度を従属変数，ML尺度の下位尺度を独立変数とする重回帰分析を行った（図1）。

表1 ゲイに対する態度の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性		
第1因子: 心理的距離因子							
3	ゲイと行動を共にすることができる。	0.857	-0.020	-0.053	-0.063	0.643	
2	ゲイと友達になれる	0.799	-0.056	-0.056	0.065	0.641	
27	ゲイと共同生活(寮・合宿など)を送ることができる。	0.662	-0.035	0.081	-0.012	0.472	
1	隣りにゲイが住んでいても気にならない。	0.611	-0.050	-0.014	0.015	0.365	
※	21	ゲイをつい特別視してしまう。	0.562	0.022	-0.099	-0.007	0.278
※	15	ゲイが家族にいたら、それを他人に言うのは恥だ。	0.546	-0.063	0.013	0.102	0.361
※	17	ゲイがSEXやキスをする場面を想像すると気持ち悪い。	0.535	-0.029	0.056	0.022	0.322
	36	ゲイと知り合いになりたい。	0.513	0.238	0.154	0.009	0.497
※	44	ゲイに恋愛感情を持たれるのは嫌だ。	0.497	-0.002	0.141	-0.030	0.311
※	14	ゲイと一緒に電話やバスに乗りたくない。	0.410	-0.113	-0.046	0.262	0.320
第2因子: ポジティブイメージ因子							
	26	ゲイは知的な人が多い。	-0.009	0.722	0.027	-0.090	0.549
	29	ゲイには面白い人が多い。	0.016	0.718	-0.068	0.096	0.488
	22	ゲイには自分に正直な人が多い。	-0.105	0.692	-0.073	0.028	0.431
	12	ゲイには芸術的センスがある人が多い。	0.134	0.624	-0.066	-0.185	0.454
	38	ゲイには話好きな人が多い。	0.011	0.594	0.003	-0.111	0.379
	41	ゲイには自分の生き方に自信を持っている人が多い。	-0.274	0.579	0.108	0.228	0.349
	24	ゲイには繊細な人が多い。	-0.105	0.573	0.061	0.033	0.328
	46	ゲイが身近にいると楽しい。	0.287	0.562	0.019	0.035	0.492
第3因子: 社会的認知因子							
	5	ゲイの人権を国がもっと擁護すべきだ。	-0.092	-0.054	0.928	-0.044	0.743
	7	ゲイの社会的な立場がもっと認められるべきだ。	0.005	-0.075	0.885	0.007	0.756
	6	ゲイのための社会的な活動(署名等)に参加できる。	0.193	0.053	0.570	-0.089	0.440
	4	ゲイが安心して過ごせる場所があるべきだ。	0.018	0.089	0.568	-0.009	0.369
	31	ゲイ同士の結婚も法律的に認められるべきだ。	0.007	0.020	0.414	0.234	0.307
第4因子: ネガティブイメージ因子							
※	39	ゲイは精神的に不健康である。	-0.026	0.016	0.001	0.785	0.594
※	40	ゲイには浮気的な人が多い。	-0.075	-0.061	0.018	0.571	0.307
※	16	ゲイは社会に悪影響を与える存在だ。	0.163	0.003	0.039	0.550	0.441
※	45	ゲイは暗い。	0.128	0.025	-0.023	0.540	0.365
※	11	ゲイを社会から隔離したほうが当人のためだと思う。	0.126	0.054	-0.070	0.490	0.288
		平方和	6.353	3.341	1.595	1.000	12.290
		因子寄与率	22.689	11.933	5.697	3.570	
		累積因子寄与率	22.689	34.622	40.319	43.889	
		α 係数	0.862	0.836	0.814	0.755	

表2 レズビアンに対する態度の因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性	
第1因子: 心理的距離因子						
2 レズビアンと友達になれる。	0.825	-0.118	0.078	-0.060	0.699	
3 レズビアンと行動を共にすることができる。	0.802	-0.084	0.037	0.050	0.700	
27 レズビアンと共同生活(寮・合宿など)を送ることができる。	0.761	0.057	-0.038	-0.001	0.563	
1 隣にレズビアンが住んでいても気にならない。	0.703	-0.110	0.047	-0.007	0.519	
※ 44 レズビアンに恋愛感情を持たれるのは嫌だ。	0.639	0.041	-0.028	-0.059	0.378	
※ 17 レズビアンがSEXやキスをする場面を想像すると気持ち悪い。	0.585	0.080	-0.085	0.147	0.380	
※ 15 レズビアンが家族にいたら、それを他人に言うのは恥だ。	0.485	0.061	0.032	0.155	0.333	
※ 21 レズビアンをつい特別視してしまう。	0.458	0.085	-0.084	0.157	0.249	
36 レズビアンと知り合いになりたい。	0.448	0.217	0.188	-0.031	0.389	
第2因子: ポジティブイメージ因子						
38 レズビアンには話好きな人が多い。	0.066	0.765	-0.107	0.027	0.542	
26 レズビアンには知的な人が多い。	0.110	0.743	-0.040	-0.071	0.588	
29 レズビアンには面白い人が多い。	0.111	0.679	0.018	-0.014	0.498	
24 レズビアンには繊細な人が多い。	-0.057	0.667	0.059	-0.006	0.469	
22 レズビアンには自分に正直な人が多い。	-0.219	0.663	0.049	0.150	0.425	
12 レズビアンには芸術的センスがある人が多い。	0.123	0.652	0.035	-0.213	0.574	
47 レズビアンにはプライドが高い人が多い。	-0.043	0.631	-0.035	-0.155	0.474	
41 レズビアンには自分の生き方に自信を持っている人が多い。	-0.213	0.627	0.147	0.236	0.428	
19 レズビアンと聞いてきれいな人を連想する。	0.257	0.429	-0.174	-0.050	0.225	
第3因子: 社会的認知因子						
5 レズビアンの人権を国がもっと擁護すべきだ。	-0.077	-0.014	0.920	-0.074	0.743	
7 レズビアンは社会的な立場がもっと認められるべきだ。	0.008	-0.027	0.891	-0.041	0.762	
4 レズビアンが安心して過ごせる場所があるべきだ。	0.050	0.002	0.715	-0.041	0.525	
31 レズビアン同士の結婚も法律的に認められるべきだ。	-0.071	-0.039	0.626	0.079	0.383	
6 レズビアンのための社会的な活動(署名等)に参加できる。	0.256	0.041	0.561	-0.042	0.503	
9 レズビアンが存在するのは自然だ。	0.052	0.029	0.444	0.238	0.364	
第4因子: ネガティブイメージ因子						
※ 40 レズビアンには浮気的な人が多い。	-0.083	-0.003	0.027	0.787	0.597	
※ 39 レズビアンは精神的に不健康である。	-0.005	0.080	0.046	0.755	0.568	
※ 45 レズビアンは暗い。	0.053	-0.026	-0.049	0.704	0.511	
※ 13 レズビアンは友達が少ない。	0.200	-0.105	-0.065	0.478	0.345	
※ 16 レズビアンは社会に悪影響を与える存在だ。	0.225	-0.029	0.099	0.455	0.395	
※ 20 レズビアンは性感染症になりやすい。	0.157	-0.055	-0.062	0.401	0.222	
	平方和	6.583	4.665	1.962	1.141	14.351
	因子寄与率	21.944	15.550	6.539	3.803	
	累積因子寄与率	21.944	37.494	44.034	47.836	
	α 係数	0.869	0.863	0.865	0.794	

ゲイ尺度の心理的距離因子は、ML尺度の主体性志向因子と1%水準 ($t = 2.91, df = 327, p < .01$)、ML尺度の多様性理解因子とは5%水準の有意な関係を示した ($t = 2.02, df = 327, p < .05$)。ゲイ尺度のポジティブイメージ因子は、ML尺度の主体性志向因子と5%水準の有意な関係を示した ($t = 1.99, df = 329, p < .05$)。そしてゲイ尺度の社会的認知因子は、ML尺度の多様性理解因子と1%水準の有意な関係を示した ($t = 4.00, df = 337, p < .01$)。ゲイ尺度のネガティブイメージ因子も、多様性理解因子が1%水準の有意な関係を示した ($t = 5.03, df = 335, p < .01$)。

3. 8 レズビアン尺度とML尺度の関連

レズビアン尺度の下位尺度でもゲイ尺度と同様にML尺度との重回帰分析を行った(図2)。レズビアン尺度の心理的距離因子は、ML尺度の主体性志向因子 ($t = 3.22, df = 333, p < .01$) と1%水準の有意な関係を示し、多様性理解因子 ($t = 2.09, df = 333, p < .05$) とは5%水準の有意な関係を示した。レズビアン尺度のネガティブイメージ因子では、ML尺度の多様性理解因子 ($t = 5.08, df = 334, p < .01$) と1%水準の有意な関係を示した。レズビアン尺度の社会的認知因子もML尺度の多様性理解因子 ($t = 4.78, df = 337, p < .01$) と1%水準の有意な関係を示した。

3. 9 ゲイ尺度とメディア利用度の関連

ゲイ尺度の下位尺度を従属変数、テレビ・新聞・インターネット・ミクシィという4つのメディア利用度を独立変数とする重回帰分析を行った。その結果、ゲイ尺度の心理的距離因子でテレビ視聴度が1%水準の有意な関係を示した ($t = -2.97, df = 334, p < .01$)。

3. 10 レズビアン尺度とメディア利用度の関連

レズビアン尺度でもゲイ尺度と同様にメディア利用度との重回帰分析を行った。レズビアン尺度の心理的距離因子で、テレビ視聴度 ($t = -3.12, df = 341, p < .01$) が1%水準の有意な関係を示し、新聞購読度 ($t = 2.397, df = 341, p < .05$) が5%水準の有意な関係を示した。

4. 考察

4. 1 ゲイ尺度及びレズビアン尺度の因子分析

こうした態度形成の要因として、近年ゲイであることを公言する(カミングアウト)男性がメディアに登場し、彼らに関する生い立ちや恋愛話が一般化したことが挙げられる。それによってゲイは今までのゲイ像よりも、「普通の人」だと認識されるようになったと考えられる。しかし、一部では「性的関心が高い」ゲイ像や「男性同士のキス」という、差別的でゲイを辱しめるユーモアが

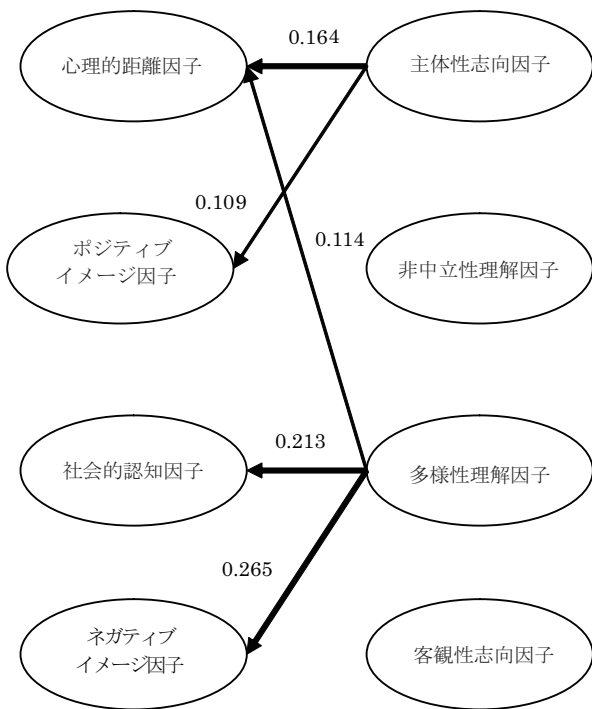


図1 ゲイ尺度とML尺度(各下位尺度)の関係図

※図中の数値は偏回帰係数 (β)

※太線は1%水準、細線は5%水準で有意な関係を示す。

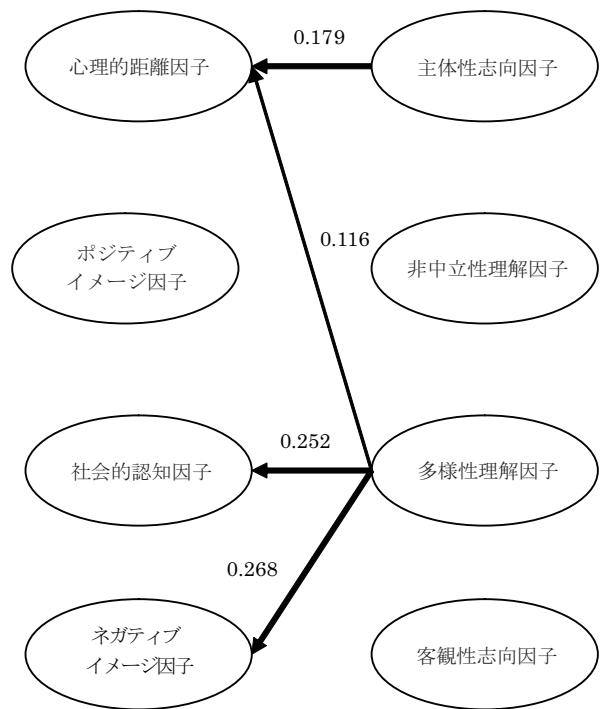


図2 レズビアン尺度とML尺度(各下位尺度)の関係図

※図中の数値は偏回帰係数 (β)

※太線は1%水準、細線は5%水準で有意な関係を示す。

残っており、それらが影響して今回ネガティブイメージ因子が抽出されたと考えられる。

一方、同性愛者の権利について1因子を抽出したことから、日本で同性愛者に対する権利の理解が進んでいると考えられる。しかし、その背景には国内の当事者による活動よりも、海外の「同性婚問題」があったと考えられる。現在日本の同性愛者解放活動が目立たないが、少なくとも、同性愛者の権利改善につながる社会整備の可能性を示唆していると考えられる。

そして、ゲイ尺度とレズビアン尺度の同じ因子内での相違点に注目したい。「心理的距離因子」では「一緒に電車やバスに乗りたくない」という項目がゲイにあり、レズビアンよりも具体的な場面をより意識している可能性が考えられる。レズビアンは抽象的な場面項目が多く、反対に抽象的な態度になっている可能性が考えられる。これはメディア露出や同性愛者のイメージとして、ゲイのほうが多いからだと考えられる。Batchelorら(2004)もレズビアンのほうがメディアでの描写が少ないことを指摘している。これは日本でも同様だと思われる。このことが同性愛者のイメージにゲイを結びつける要因にもなっていると考えられる。

また「ポジティブイメージ因子」では、ゲイには「きれいな人を連想する」「プライドが高い人が多い」が入っておらず、「身近にいると楽しい」が入っていた。これにはジェンダースtereotypeやメディアの影響が考えられる。通常男性には男らしいstereotypeが向けられるが、メディアで女性的なゲイが多く登場し、ゲイは女性的とされている。ゲイ=女性的と一般化できないにしても、「同性愛入門」でもふれているように、女性的な人が多いようだ。一方レズビアンはゲイとは反対に男性的というstereotypeを持たれる。そのため、ゲイには女性stereotypeが適用され、今回の「プライドが高い」は男性のジェンダー特性語であるためゲイには適用されずレズビアンに適用された。「きれいな人」は元々女性語だが、現在では男性にも肯定的に用いられるようになってきており、必ずしもゲイに「きれいな人」が適用されなかったと考えられる。「一緒にいると楽しい」という項目は、メディア露出しているゲイのイメージを反映しているものと思われる。

さらに「ネガティブイメージ因子」では、ゲイには「社会から隔離したほうが当人のためだと思う」が入っており、「友達が少ない」「性感染症になりやすい」が入っていなかった。これは「心理的距離」と同じく、ゲイとの関係性は具体的に考え、レズビアンの場合は存在が見えにくいぶん「隔離」という発想自体少ないと考えられる。またレズビアンでは「友達が少ない」「性感染

症が多い」という「イメージしづらい事柄」も項目として入っており、存在が見えにくいことでネガティブさを持たれやすくなっていると思われる。またゲイで「性感染症になりやすい」という項目がないのは、性感染症は一部の問題ではなくみんなの問題という意識が高まっているからだと思われる。日本のAIDS感染者数は先進国の中で唯一増加していると言われ、社会全体で性感染症が啓発されている。こうした背景が関係していると思われる。

4. 2 ML尺度の因子分析

同性愛者の情報を理解する場合、リテラシーの働きとして以下の流れが考えられる。

まず同性愛者に関するあらゆる情報を受け取り(多様性理解因子)、自分の記憶や複数のメディア情報との兼ね合いを考えていく(客観性志向や非中立性理解因子)。それによってメディアがどのような意図で情報発信しているかを理解し、その情報に賛同、反対する。この最終的な判断には、自分の主体的な考え(主体性志向因子)が必要である。

4. 3 ゲイ尺度の接触度とML尺度による分散分析

ポジティブイメージ因子は接触度と関連があり、自分の友人に同性愛者がいるのと、学校やアルバイト先などの身近にいる場合では、友人に同性愛者がいるほうが高いポジティブイメージを持っていた。同性愛者を「友人」として認められるような、多様な価値観が友人関係の中でも重要であると考えられる。またネガティブイメージ因子はメディア・リテラシーとの関連があり、メディア・リテラシーを身につけていくことが、ゲイのネガティブイメージ改善には重要であると考えられる。

4. 4 レズビアン尺度の接触度とML尺度による分散分析

友人に同性愛者がいるほうが高いポジティブイメージにつながるとゲイ尺度では説明されたが、レズビアンではそのような結果が見られなかった。その一方で、ネガティブイメージ因子はメディア・リテラシーとの関連があった。ゲイとの差異について今回の調査結果からは明らかにできていないが、少なくともメディア・リテラシーを身につけていくことが、レズビアンにとってもネガティブイメージの改善には重要であると考えられる。

4. 5 ゲイ尺度のSESRA-Sと性別による分散分析

ゲイの心理的距離因子はSESRA-Sが高い人のほうが高得点だった。次の項で述べるが、レズビアンに比

べてSESRA-Sと関係する因子が少なかった。これはSESRA-Sが元々女性の姿勢を問うものだからだと考えられる。

性別要因については、女性が3因子で有意に高かった。これには男性のホモソーシャルな関係が影響していると思われる。ホモソーシャルとは男性同士の連帯関係を示し、ホモフォビア（同性愛嫌悪）とミソジミー（女性蔑視）を前提としている。以前の項で触れているように、ゲイは「女性的」とされることもあり、同性愛嫌悪や女性蔑視の視線を受けることにある。そのような状況のゲイが女性との親密度を上げて、カミングアウトしやすい状況になっていると考えられ、したがって女性のゲイ態度が男性よりも良い結果につながったと考えられる。

4. 6 レズビアン尺度のSESRA-Sと性別による分散分析

レズビアンの心理的距離・ネガティブイメージ・社会的認知各因子で、SESRA-Sが高い人のほうが高得点だった。平等主義が元々女性のための考え方であるから、ゲイよりもレズビアンの側面に、よりプラスに働いたと考えられる。いずれにしても、SESRA-Sを高く持つことが態度の改善に影響するので、今後も男女共同参画の施策を進めていくべきであると考えられる。

また、男性のほうが女性よりレズビアンとの心理的距離が近く、先行研究の傾向（和田（1996）、中村（2006））と一致した。男性は、ゲイよりもレズビアンを好む傾向があるようだ。

4. 7 ゲイ尺度とML尺度の関係

ゲイ態度の心理的距離因子においては、メディア・リテラシー尺度の主体性志向因子と多様性理解因子が関係していた。メディアのゲイの描き方はまだ偏見に満ちている。そうした中で、どのような情報も受け止めて、情報の正当性を検証する主体性が必要だと考えられる。

またポジティブイメージ因子においては、主体性志向因子が関係していた。物事の良し悪しについて主体的に取り組む姿勢がない限り、社会にある差別・偏見のイメージをただ受け入れてしまうと思われる。

社会的認知因子とネガティブイメージ因子では、多様性理解因子が関係していた。同性愛者は自分と異なる価値観の持ち主だが、社会的に受容できるという姿勢が求められており、ネガティブイメージ因子の項目は、ゲイがいる状況や社会の多様化に対する拒否反応の項目であることから、ネガティブさを持たないためにも、多様性理解が重要であると考えられる。これは志村（2005）の対人イメージの向上に関する示唆と同様だった。

4. 8 レズビアン尺度とML尺度の関係

レズビアン尺度はゲイと異なり、ポジティブイメージ因子における有意な因子が無かった。メディアにおいてレズビアンの情報はあまり流されず、女性同士の恋愛映画も描かれ方は差別的・偏見的というよりむしろ好意的である。ゲイに関する情報とは質が異なる可能性が考えられる。こうした情報を要因として、主体性志向がなくてもレズビアンに対してポジティブイメージを持ちやすくなっていると思われる。

これ以外の因子は、ゲイ態度と同様の有意な因子関係が見られ、レズビアンでもゲイと同様なメディア・リテラシーとの関係が考えられる。

4. 9 ゲイ尺度とメディア利用度との関連

ゲイ尺度では、心理的距離因子にテレビ視聴度のマイナスの影響が見られ、テレビ視聴が多い人ほど、ゲイとの心理的距離を感じることがわかった。テレビが受動的の情報理解という特徴を持つことで、メディア・リテラシーの主体性志向因子とは正反対の効果を持つと思われる。

4. 10 レズビアン尺度とメディア利用度との関連

レズビアン態度でも、テレビ視聴が心理的距離にマイナスの影響を与えていた。加えて、新聞購読度が高い人は、レズビアンとの心理的距離が小さかった。テレビと新聞では心理的距離に対して逆の力が働くと思われる。

新聞は多くの情報から自分で情報を選んで読まなければならない、主体性志向を必要とする。これが心理的距離に対し主体性志向の関係を生成し、レズビアンとの心理的距離に影響を与えていると考えられる。

5. 今後の課題

5. 1 同性愛者を取り巻く問題について。

今回の研究から、同性愛者に対する社会的認知は高まっていると考えられた。しかしそれは海外の影響を受けているようで、日本における当事者はまだ見えていない。日本の当事者が本当に困っているのか、当事者がメッセージを出さない限りわからない。困難がない当事者も、ある当事者もいるようだが、同性愛者という一つのコミュニティがそれぞれの立場を理解しあって意見集約しているとはいえないようだ。ゲイコミュニティはレインボーフラッグ（虹色の旗）が目印になっているように、様々な個性・存在（特に様々なセクシュアリティ）を肯定的にとらえている。しかし各コミュニティ成員が異なる方向性を持つだけで、コミュニティが存在する意義はいったいなんなのかが明確にできていない。このよ

うな状況では、同性愛者が社会的に影響を持つことなどは考えにくいと思われる。同性愛者またはそのコミュニティが社会的に影響を持ち、問題を解決していくためには、「同性愛者が社会的に見える存在になること」「同性愛者コミュニティがもっと社会的に活動すること」が必要だと思われる。方法は個人的にも集団的にもいくらかでもあるが、いずれにしても可視化の過程を進めるために、当事者自身たちがもっと団結して物事を進めていく必要があると思われる。そうすれば日本における同性愛者の権利や立場は向上する方向に向かうと思われる。

一方で、同性愛の原因は依然明確ではなく、堀田(1998)が述べているように、同性愛は「生物学的素因を持ち、さらに後天的な環境や経験を通じて同性愛が形成される」とまでしか分かっていない。今後の同性愛に関する生物学的及び医学的研究が、社会全体に影響を与えることは必至と思われるため、今後その研究そのものから注意して見ていくべきだと考えられる。

5. 2 多様性価値観に対する受容性について

メディア・リテラシーの主体性志向が同性愛者態度と関連するため、新聞を読むことが、主体性志向を高める一つの方法になると考えられる。また多様性理解度を高めることも有益であると考えられた。友人に当事者を持つこととポジティブイメージ向上に関連があるため、同性愛者の知人を持つことが同性愛者への理解を高める一つの解決策になるとと思われる。

しかし今回は、多様性理解に有効なメディアがわからなかった。今後は多様性を理解していく方法や具体的に高めるプログラムづくりの研究をしていく必要がある。

5. 3 メディア分析について

Batchelorら(2004)のように、セクシュアリティに関してメディアの内容を分析した研究は、日本でも行われている。しかし同性愛の描写を分析しているものは少ない。今後はメディアで描かれている同性愛者像をより詳細に分析することが求められると思われる。

5. 4 SESRA-Sについて

電通総研の世界価値観調査の結果からも分かるように、今後も価値観が変容していくことは確実である。性役割もそれに伴って変化するものであり、平等主義的性役割態度も価値観が更新する中で変化すると思われる。今回用いたSESRA-Sは、女性に対する性差別的処遇をどのくらい認識しているかを問うもので、「男性がどうあるべきか」という問いかけが少なかった。この項目では男性協力者にとって、自分の問題として捉えにくかった

と思われる。今後はより男性の姿勢を問う形で性役割態度の尺度づくりが行われるべきだと思われる。

引用文献・参考文献

- Batchelor et al., 2004, Representing young people's sexuality in the 'youth' media, HEALTH EDUCATION RESEARCH, 19(6), 669-676
- 電通総研(担当:山崎聖子), 2005, 世界価値観調査 2005 国内結果レポート
- 福富護(編), 2006, ジェンダー心理学, 朝倉書店
- 伏見憲明(編), 2003, 同性愛入門 [ゲイ編], ポット出版
- 原田曜平, 2004, 浮気, 北朝鮮, 同性愛, 整形手術...博報堂生活総研「タブー調査」の結果公開, プレジデント, 42(6), 142-145
- 日高庸晴, 2004, ゲイ・バイセクシュアル男性のHIV感染予防行動と心理・社会的要因に関する研究 研究報告書, <http://www.joinac.com/spirits-wave2/>
- 堀田香織, 1998, 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成, 学生相談研究, 19(1), 13-21
- 市川庸輔, 2004, 「総合演習」学生レポート 「見えない隣人」としての同性愛者との対話, 國學院大學教育学研究室紀要, 39, 176-192
- 石丸徑一郎, 2004, レズビアン・ゲイ・バイセクシュアルについて(第44回日本心身医学会総会シンポジウム), 心身医学, 44(8), 589-594
- 内閣府, 2004, 男女共同参画社会に関する世論調査報告 <http://www8.cao.go.jp/survey/h16/h16-danjo/index.html>
- 中島義明ら(編)心理学辞典, 有斐閣
- 中村智章, 2006, 同性愛者へのイメージと態度, 本学 2005年度卒業論文
- 志村和哉, 2005, 精神障害に対する偏見とメディア・リテラシーとの関連, 本学2004年度卒業論文
- 鈴木みどり(編), 2004, Study Guide メディア・リテラシー 入門編, リベルタ出版
- Unger, R.K. 編, 森永康子・青野篤子・福富護 監訳, 2004, 女性とジェンダーの心理学ハンドブック, 北大路書房, 324-340
- 和田実, 1996, 青年の同性愛に対する態度:性および性役割同一性による差異, 社会心理学研究, 12(1), 9-19
- 渡辺大輔, 2005, 若年ゲイ男性の学校内外での関係づくり, 教育学研究, 72(2), 38-47
- 湯川隆子, 2002, 大学生におけるジェンダー(性役割)特性語の認知~20年の変化~, 三重大学教育学部研究紀要, 53, 73-86

<謝辞>

本論文は、第二執筆者の指導の下に、第一執筆者が東京学芸大学卒業論文(2006年度)としてまとめた内容を加筆修正したものです。ご協力いただきました全ての皆様に、この場を借りて深く感謝いたします。

The relationship between media literacy and attitudes toward gay and lesbian

Jin MIYAZAWA , Mamoru FUKUTOMI

*Department of Educational Psychology**

Abstract

Not only the attitude toward gay but also toward lesbian consists of four factors; the psychological distance, the positive image, the social acceptance, and the negative image. The factor “the social acceptance” indicate that the participants make a stand on right for gay or lesbian. The attitude toward gay has several items of concrete situations, while the attitude toward lesbian has several items of abstract conditions. The media literacy also consists of four factors; the identity, the understanding non-neutrality, the diversity perception, and the objectivity. Effects of the identity on psychological distance and the positive image were evaluated. Effects of the diversity perception on psychological distance, the social acceptance, and the negative image were also evaluated. They imply that the identity and the diversity perception are useful for the improvement of the one’s attitude toward gay or lesbian. The more one have the attitude to egalitarian sex role, the better one have the attitude toward gay or lesbian. It suggested that continuing the stand on equal right for woman have a positive effect on gay or lesbian. The people having gay or lesbian friends have better attitude compare to the people having no gay or lesbian friend. It implies that to get better attitude, the diversity perception at the friendly level are needed.

Key words: gay, lesbian, media

* Tokyo Gakugei University (4-1-1 Nukui-kita-machi, Koganei-shi, Tokyo, 184-8501, Japan)